

エンジェル

2007(平成19)年11月19日鑑賞〈GAGA 試写室〉

★★★★



監督・脚色＝フランソワ・オゾン／原作＝エリザベス・テイラー『エンジェル』／出演＝ロモラ・ガライ／サム・ニール／シャーロット・ランプリング／ルーシー・ラッセル／マイケル・ファスベンダー／クリストファー・ベンジャミン／ジャクリーン・トン／ジャンニー・デュビツキ／ジェマ・パウエル（ショウゲート配給／2007年ベルギー、イギリス、フランス合作映画／119分）

……あなたは、20世紀前半を生きたエリザベス・テイラーという作家の『エンジェル』という小説を知ってる……？ 知らないなら、この映画によって華麗なる流行作家エンジェルの一生を考えてみるのも楽しいかも……？ 富、名声そして恋、若くしてこの3つを手に入れたエンジェルは、ある意味幸せ者だが……？ ケータイ小説の流行、くだらない原作の映画化が続く昨今の日本の嘆かわしい状況下、この映画は重大な問題提起をしているのでは……。



エリザベス・テイラー原作と聞いたが……？

この映画の原作はエリザベス・テイラー。そう聞くと、あなたはきっと「え、あのエリザベス・テイラーが小説を書いていたの……？」とビックリするはず。私も全く同じ反応だった。しかしそれは全くの誤解で、『クレオパトラ』（63年）などで有名な女優エリザベス・テイラーと、1912年に生まれ1975年に死亡したイギリスの女流作家エリザベス・テイラーは同名ながら全くの別人。

プレスシートによれば、この映画の原作となった『エンジェル』は1957年に出版された小説で、そのモデルとなったのは「オスカー・ワイルドと同時期に活躍し、ヴィクトリア女王のお気に入りでもあったマリー・コレリ。彼女はスター作家となった最初の作家の一人で、ベストセラー小説を書き、大衆を熱狂させた」とのこと。しかし「現代ではイギリスにおいてさえ、忘れ去られている」のなら、私が知らなかったのは当然。ああ、安心した。なぜなら、そんな有名なイギリスの作家を知らなかったのかと少し自己嫌悪に陥りそうだったから……？

一瞬の流行作家はいつの時代にも……？

プレスシートには、豊崎由美氏（書評家）の「ある意味、愛さずにはいられないトリックスター」という解説があるが、それを読んで私は「よくぞ、ここまで書いてくれた！」と大いに感心。それは、豊崎氏がエンジェルのような「ロマンス小説書き」をバカにしてきたと大胆な告白をするとともに、「ここ数年、若い世代を中心に読まれている『Deep Love』『恋空』『赤い糸』といったケータイ小説や、映像化されたような恋愛小説のほとんどは百年の寿命を持っていないとわたしは考えます」と明言しているから。それは、豊崎氏が「たいして売れはしなくとも文学性の高い小説を、ブックレビューという形で応援してきたつもりです」という価値観に立ち、これを堅持していたため。

私は大衆受けを狙い、アホバカ大衆が喜ぶようなストーリーを計算づくで入れこんだ軽薄短小な小説が大ヒットしていることに危機感をもっているし、そんな小説ばかりを映画化している映画界に危機感をもっているが、それを大胆に公表するのはかなり勇気のいること。その意味でこの解説にビックリするとともに感心したが、まさにエンジェルは、豊崎氏が指摘するような、どの時代にもいるような一瞬の流行作家……？

でも、エンジェルはいい女

私は『8人の女たち』（02年）で有名なフランスのフランソワ・オゾン監督の映画をこれまで観たことがなかった。しかし、プレスシートで彼が「脚色にあたって最も難しかったのは、エンジェルを好ましい人物にすることだった。不遜で意地悪な面があるにもかかわらず、チャーミングで人をひきつける人物としてエンジェルを描くことが重要だと感じた。即座に頭に浮かんだのは、スカーレット・オハラだった。彼女は、まさに愛と憎しみを同時に抱かせるキャラクターだからね」と語っているのを読んで、はじめて彼の女性観を理解することができた。ひょっとして彼はエリザベス・テイラーの原作を読んで、エンジェルという女性に恋をしてしまったのかも……？

映画の冒頭スクリーン上に登場する女学生時代のエンジェルは、親や学校に反抗的であるばかりか、鼻持ちならないほど過剰な自信にあふれているイヤ味な女。また、処女作『レディ・イレニア』の原稿を出版社のセオ・ギルブライト（サム・ニール）

が認めてくれた時の交渉態度や、彼の家に招かれてギルブライトの妻ハーマイオニー（シャーロット・ランプリング）と食事をした時も悪い印象ばかり。さらに、成功を収めてからの、いかにも成り上がり者的な態度は、ある意味数年前のホリエモンこと堀江貴文と同じような雰囲気……？

したがって、エンジェルを映画化するにあたって、その嫌味な点をトコトン強調すれば全く違うテイストの映画になるはずだが、フランソワ・オゾン監督は「基本的に、エドワード朝の足枷から抜け出すことに成功した女性で、初期のフェミニストと言える」と分析。そして大いに問題ありだが、根は単純で誠実そして人の何倍も努力を重ねる中で少女の時から夢を実現させた、あの時代に珍しい女性として描いたわけだ。そう考えると、エンジェルって意外といい女……？



エンジェルが手に入れたものは……？

エンジェルの武器は少女時代から鍛えに鍛えた想像力。そして想像力は無限だから、エンジェルにとって小説のネタは頭の中でいくらでも広がっていくもの。そうすると、彼女にとって小説を書くということは、それをただペンを使って文章に移しかえるだけの作業。したがって、そのデビュー作『レディ・イレニア』が大衆に受け入れられて大ヒットすれば、あとはところてん式にすべて順調……。

それによって彼女が手に入れたのは、誰もが欲するカネと地位つまり富と名声だ。とりわけ少女時代に憧れたあの豪邸「パラダイス」を手に入れたのは大きな夢の実現だった。少女時代の彼女とデビューしたばかりの彼女にとってはその2つですべての夢は実現したはずだったが、ある時期もう1つ手に入れたいと彼女が願うようになったのは……？



運命的な出会いは……？

流行の先端を行く人気作家にとって熱狂的なファンは珍しくないかもしれない。しかし、はじめてみたエンジェルの崇拝者だという、ノーリー卿の姪ノラ・ハウ＝ネヴィンソン（ルーシー・ラッセル）のエンジェルへの崇拝ぶりは少し異常……？ 他方、その弟エスメ・ハウ＝ネヴィンソン（マイケル・ファスベンダー）は端正な顔立ちの2枚目だが、エンジェルの文学には全く興味のない画家。しかも自分の芸術にうるさい頑固者の画家だ。

したがって、大衆迎合型の人気作家（？）エンジェルと、暗い色を好むこだわりの頑固者画家エスメとはそもそも相性が悪いはずと思えたが、エンジェルはその2枚目ぶりにホレた様子。そのため、エンジェルの個人秘書になりたいというノラをエンジェルが特に必要もないのに雇ったのは、実はエスメが目当て……？　そこでエンジェルはエスメに対して肖像画を依頼することに。

そんなノラとエスメ姉弟との出会いが、その後のエンジェルの人生を大きく左右する運命的な出会いになろうとは……。

戦争勃発！　さてエンジェルのスタンスは……？

エンジェルが少女時代を過ごしたのは1900年代のはじめ。1902年に日英同盟を締結した日本は、1904～5年の日露戦争に勝利し、次第にアジアの一等国としての地位を築いている時期だった。そんな中ヨーロッパで勃発したのが、1914年からの第1次世界大戦。

『風と共に去りぬ』(39年)では、南北戦争が勃発する中次々と軍に志願していく男たちの姿が描かれるが、それに対するスカーレット・オハラへの対応はかなり利己主義的なもの……？　そしてそれは『エンジェル』でも基本的に同じ……？　もっとも、エンジェルにとってエスメが「軍に志願する」と一方的に宣言したのは何とも意外だったよう。エンジェルは泣き叫びながらそれに反対し、「その扉を出て行くなら、もう2度と開けないわ！」と叫んだが……。

私はそんなエスメの愛国的な行動を崇高なものとするわけではないが、「われ関せず」とばかり、1人「パラダイス」の中で贅沢な暮らしを続けようとするエンジェルのスタンスも如何なもの……？　またその後、広大な「パラダイス」の一部を野戦病院の敷地に提供してくれないかとの申し出に対するエンジェルの反応は、「私の前で戦争の話は一切しないで！」とわめくものだったから、これも如何なもの……？　これでは、メイドの1人が憤然としてメイドの服を脱ぎ、「やめさせてもらいます！」とタンカを切ったのも当然……。

芸術家とパトロン、そして生きるたくましさは……？

一般的に芸術家は孤高の極みを求めるもので、いわば「専門バカ」の典型。したがって、良きパトロンに巡り合えれば順調におのれの芸術一筋に活躍することができる



が、そんなパトロンに巡り合えたのはルネッサンス期のイタリアにおいて有名なメディチ家の庇護を受けたミケランジェロやバイエルン国王ルートヴィヒ2世の庇護を受けたリヒャルト・ワーグナーなどごく一部だけ……？ そのことは、モーツァルトやベートーベンをみても明らか。そういう意味では、エスメはエンジェルと結婚し、その個人的な財力のおかげで立派なアトリエを与えられ自由な創作活動を展開できていたが、そもそもエスメに自力でパトロンを見つける才覚など全くないことは彼の性分をちょっとみれば明らか。

また、生きるたくましさをもった芸術家は古今東西ほとんどおらず、概してその神経は繊細で傷つきやすい人が多いことは、芥川龍之介や中原中也をみても明らか……？ そしてエスメは、ここでもそのグループに該当するようで、脚を失って戦場から戻った彼は酒とバクチにのめり込んでいくばかり……。

これに対して、同じ芸術家でもエンジェルの生きるたくましさは、スカーレット・オハラと同じで超一流だったが、そんなエンジェルをもってしても自由にならないのが男のココロ……。

これは意外！ エスメに愛人が……

女は母になろうとすると、その心の持ちようまで変わるもの……？ あれほど戦場に赴くエスメに対して強気で言い放ったエンジェルだったが、お腹にエスメの子どもを宿していることを知ると、既にその心は彼を許し、その帰りを待つ心境に。

ところが、これは意外！ これだけは原作のつくり方のうまさに感心させられたが、実はエスメには愛人がおり、時々休暇をとって戦場からロンドンに帰ってきていたらしい……。それを偶然発見したのは、同じレストランで食事をしながら出版の打ち合わせをしていたノラとセオ。もちろんノラはそれをエンジェルに言わないまま自分の胸に秘めていたが、さてその愛人とは一体ダレ……。？ レストランのシーンではそのオンナは顔を見せないで全くわからないが、映画終盤に至りその女性が誰だったかを知ると、エンジェルはもちろんあなたもきっとビックリするはず。

しかし、芸術一筋で頑固者の画家だとばかり思っていたエスメにこんな才覚（？）があったなんて、私にはホントに意外！ しかも、その愛人との間には、何と子どもまで……。

エンジェルの人生は幸せ……。？ それとも……。？

エンジェルの晩年は作家としての人気もガタ落ちで、人々の記憶から忘れ去られていくことに……。それに対して、エスメの描いた絵画は対照的に……？

そんなエンジェルを見守るのは、若い時からずっとエンジェルを崇拝してきた個人秘書のノラだけ。もっとも考えてみれば、そんな人が1人いれば十分……。？

はじめから終わりまで、エンジェルの作家としての才能を認めていないセオの妻ハーマイオニーの目には、「なるべくしてなった結論」という冷たい見方になるが、セオの見方はそれとは全く異なり、富と名声と恋の3つを手に入れたエンジェルは幸せ者という温かいもの。ここでハーマイオニーからセオに対して「あなたはエンジェルを愛していたから」「それはあなたの目でわかったわ」という意外な言葉が……。さすが、フランソワ・オゾン監督の人物洞察力は鋭い！

ノラとエスメ姉弟そして、セオとハーマイオニー夫妻に見守られながら、華麗な短い一生を終えたエンジェルは幸せ……。？ それとも……。？

ロモーラ・ガライが16歳から44歳までを熱演！

チャン・ユアン 張 元監督の中国映画『ただいま』(99年)では、ヒロイン^{リウ・リン}劉琳が16歳とその17年後の33歳の両方を演じたことの不自然さを指摘した。それとの対比で言えば、エンジェルを演じたロモーラ・ガライが、16歳の女学生時代に始まり、小説家として大成功を収めた30代そして人生の下り坂に向かい、遂に44歳の若さで死亡するまで、多様に

変化する「女の一生」を演じ分けた
熱演に拍手！

ちなみに、『ただいま』のヒロイン
劉琳は1974年生まれで公開当時
25歳だったが、エンジェルを演じた
ロモーラ・ガライも1982年生まれ
だから実年齢は25歳。それにもか
わらず違和感がなく、1人の女優に
よる熱演と映ったのは、イギリス人
の年齢が日本人（東洋人）にはわか
りにくいため……？

2007(平成19)年11月20日記

今月四日に発表され
た二〇〇七年の書籍年
間ベストセラーでは、
女子中高生が愛読する
ケータイ小説が文芸部
門のベスト3を独占。
ベスト10に五作が。そ
こで「純文学関係者は
『ケータイ小説を文章
がたたく、ストーリー
も型にはまりがち、
と異端視してきたが、
その動向は無視できな
くなりつつある」と報
じられた。

『エンジェル』は二
十世紀初頭、これと同



エンジェル

あすからテアトル梅田ほかで公開



「エンジェル」の一場面

ケータイ小説全盛に異議アリ

様のロマンス小説を書き続けて一世を風靡した流行作家の生きざまを描いた映画。貧乏で孤独な少女時代のエンジェルの武器は豊かな想像力。人間の想像力は無限だから、その発露が一発当たれば後頭の中に浮かぶ情景を文章化すればいいだけ。またたく間に彼女は想像力とペンの力によって富と名声を手に入れ、ついに恋まき続けた。モジリアーニと同様、生存中の評価は低かった。しかし二十一世紀の今、エンジェルには誰も興味を示さず既に忘却のかなただが、孤高の画家だったエスメの作品は？

軽薄短小な小説とその映画が大ヒットして今や絶頂。しかし、それがある実力か、それに続く流行なの？ 大阪市長選も、それに続いて府知事選挙もまた、人気投票になっ

た。彼女が愛し結成した画家エスメは専門バカの典型。頑固な彼の作品は、ゴッホやものだ。

第3章

内容の面白さは男女を問わず

大阪日日新聞 2007(平成19)年12月21日